拾われた俺、最強のスパダリ閣下に全力で溺愛されてます

迷い子の月下美人

登場人物紹介
サウス
元Aランク冒険者で、
引退後に食堂兼酒場の
マスターになる。
穏やかで面倒見が良く、
情報通でもある。
スサンダ
オーガスタの街の
冒険者ギルドマスター。
規格外のノアとアークに
振り回されがちだが、
二人を気にかけている。
精霊王
『古の森』という
精霊達の住む森にいる。
ノアの能力や出自の謎に
深く関わっている
ようで……？
アーク
竜人族の国の大公家の三男にして、
この世界でも数少ない
Sランク冒険者。
普段は穏やかだが、
ノアには強い独占欲と愛情を向け、
徹底的に甘やかし尽くす。
ルル
魔人族の魔導師寄りの
剣士で、ギギの弟。
突っ走るギギをたしなめる、
しっかり者の苦労人。
ギギ
魔人族の剣士で、
ルルの兄。
陽気で弟思い。
しばしば突っ走りすぎる
一面がある。
ノア
極度の人見知りで、
対人スキルはLv.1。
無口で無表情なため、
周囲からは近寄りがたいと思われている。
長年孤独な生活を送ってきた
薬師兼錬金術師。

プロローグ

「なるべく、優しく……善処する。が、暴走したらすまない。先に謝っておく」
彼はやや苦しげな表情でそう言う。
そして、初めての行為に逃げ腰になる俺にのしかかって、口付けをした。
え？　え？
ソレって『優しくするつもりだけど、無理だからごめんね』っていう意訳では？
そう思うも彼に口腔内をなぞられ、擽られ、舌の付け根から吸い上げられる。その巧みな舌使いに翻弄され、俺の思考は蕩けていく。
何で、どうしてという気持ちとは裏腹に、身体はどんどん熱を持つ。戸惑いはあっという間に快感に塗り潰されて、口付けが止まると俺は彼にお強請りしていた。
「気持ちいい、アーク、もっとぉ」
「あぁ、ノアの気の済むまでしてあげるよ。それ以上のこともね」
微笑んで返されたその言葉に、俺は嬉しくなってアークに顔を寄せた。
いつの間にか全ての衣服は脱ぎ払われて、俺の白くて細い脚も露わになっていた。その中心を

アークが優しく握ってくる。
「コレに触れたヤツはいるの？」
「やあん、いない、誰も。アークだけ」
そう彼に応える。だって今までずっと独りで慰めていたから。
「そう。よかった。これからも俺だけだよ」
アークは嬉しそうに言うと、俺の首筋にねっとりと舌を這わせながら握っていたソレを軽く扱き始める。
「ぁ、うん。アークだけぇ。あ、んんっ！」
先走りで濡れていたソレは彼の手であっという間に高められ、呆気なく精を吐き出した。
「気持ちいいね、ノア」
「ん、きもちい、もっと」
「いいよ、こっちも触ってあげるね」
俺は荒い息で、舌っ足らずになりながら、まだまだ収まらない熱にもっととせがむ。アークはゴクッと喉を鳴らして俺の後孔へ指を伸ばした。
初めて挿入される異物感に思わず身体を固くすると、優しく身体を撫でられ、宥められる。
やがてそれは気にならなくなり、気づけばアークの熱くて硬い剛直が後孔をぐちゅっと擦っていた。
「ふっ。ノアが誰に初めてを捧げたか、誰と性交（セックス）してるのか、その瞳でよく見て、その身体に刻みこんで？」
そう言って獰猛に笑った彼に怯えて一瞬頭が冷えたけど、直後に襲った圧迫感とすさまじい快感に頭が沸騰して、俺は何も考えられなくなったのだった。

第一章　孤独な薬師の迷宮（ダンジョン）探索

先日、俺は失恋した。

ずっと前から好きだったあの人に、告白する前に。

あの人は、獣人国にあるこのアインの街に一年ほど前から住んで冒険者稼業をしていたが、最近冒険者を辞めたという噂を聞いた。

あの人はいつの間にか可愛い恋人を作ってデキ婚していたのだ。

相手は街で人気の雑貨店の跡取りだった。近頃見ないと思ったら、そういうことか。

俺の恋心は誰にも知られずに葬り去られた。

俺の名はノア。

しがない薬師で錬金術師。ついでに冒険者もやっていて、二足どころか三足のわらじを履く。

赤ん坊のときに拾って育ててくれた薬師で錬金術師のラグ爺さんの跡を継ぎ、錬金術師ポーションを販売する店を切り盛りしている。爺さんはこの街の生まれではなく、店舗兼自宅は俺を拾う少し前に借りたらしい。

俺の名前は、拾ったときに首から提げていたプレートに刻まれた『ノアズアーク』という言葉から取ったそうだ。

ノアは古代語で『自由』って意味。

ラグ爺さんは俺に色々教えてくれたけど、今更ながらその知識は異常だって分かったよ。古代語が分かるって、一体何者だったんだ？　自分のことは何も知らせず儚くなってしまって。

元々薬師の素質があったらしい俺は、物心がつく前から、ラグ爺さんにおんぶされた状態で薬の調合を眺めては覚えていったらしい。そしてしまいには、ラグ爺さんの使う錬金術も見よう見まねで使い出して、こりゃたまらんと慌てて魔力操作から教えこんだらしい。

うん。らしいって、ちびすぎて記憶にない。全て爺さんから聞いた話だ。

この世界、誰しも魔力はあるが、その身体に魔力を溜められる量は個人差があり、そこに魔法の得手不得手も加わると、魔法が使えない、もしくは使えても少しだけという者も一定数いる。

ちなみに薬師と錬金術師の調薬は何が違うのかというと、薬師は、様々な薬草を薬研ですり潰したり鍋で煮たりして抽出した成分に自分か魔石の魔力を注入して作る。

それに対して錬金術師は、素材をそのまま錬金術専用の魔法陣の中で分解させて融合する。最初から最後まで魔法で行うので、錬金術で生成されたものは錬成と言う。

薬師が調薬したものは『薬師ポーション』、錬金術師が錬成したものは『錬金術師ポーション』と呼んで区別されている。

薬師・錬金術師ポーションともに、初級・中級・上級ポーション、解毒ポーションがよく使われる。さらに、使う薬草や調薬する者の魔力の質や腕前で品質のランクが変わり、ランクはS、A、B、Cの順で、Sが最高、Cが最低。

ランクで回復の度合いが変わるが、初級はごく浅い切り傷や擦り傷に効果があり、中級は二、三センチくらいの深さの刺し傷や切り傷を治す。上級は骨が見えるくらい深い傷や骨折などを元に戻せる。

また解毒ポーションは等級がなく、品質のランクで効果が変わる。もちろん全ての毒に効くわけではない。

基本的にポーションは、外傷は直接患部に、毒を吸いこんだり口にしたりした場合は飲んで使う。

まあ、そんなもの（俺は主に錬金術師ポーション）を錬成して、販売しているわけだ。

さて、今日も今日とて俺は迷宮（ダンジョン）に潜る。薬草とその他の素材を求めて冒険者になったんだしな。

潜る前に冒険者ギルドに顔を出すと、扉を開けた途端、冒険者や職員達から視線を向けられた。

俺はいつも足首まである暗い緑色のローブを羽織り、ウサ耳のついた大きめのフードを目深に被って顔を隠すようにしている。

左側に一筋金色のメッシュが入った腰まであるまっすぐな黒髪に、銀色の切れ長の瞳を持ち、家にある鏡で見る限りそんなに顔立ちは悪くない……と思うが、モテたことはない。

たくさんの目を向けられて一瞬ドキッとするが、すぐに視線を外されてホッとする。

というのも俺は極度の人見知り。偏屈だったラグ爺さんは人付き合いをほとんどせず、俺も小さいときから引き篭もり生活だった。

おかげで表情筋が仕事をしなくなって、無口で無表情が当たり前。

加えてソロでAランクのため、威圧的だとか近寄りがたいとか陰口を叩かれてしまい、俺は自衛

も兼ねてフードで顔を隠すようになったんだ。いい加減慣れたけどね。

『孤独（ソロ）の薬師』なんて、二つ名があるのも知っている。二つ名は、有名な冒険者に付けられる称号みたいな呼び名だけど、孤独ってなんだよ。確かに俺はソロだけど、好きで独りなんじゃねえ。

ただ、この冒険者ギルドではそんな悪感情を向けられず、居心地がいい。

そんなことを思いながら、俺は左の壁にあるクエストボードの依頼を眺める。

クエストボードには様々な依頼が冒険者ランクごとに貼り出されていて、自分のランクの上下一つまでは受けてもいい。

冒険者登録をすると貰える冒険者ギルドタグ。そこに記載される冒険者ランクは、初めはFランクで、駆け出しの初心者だ。そこから依頼を達成していくと、E、D、C、B、A、Sと一つずつランクが上がる。

ランクごとにタグの材質も変わって、俺のAランクタグは魔導銀（ミスリル）。

ちなみに最高ランクのSはこの世界でも片手くらいしかおらず、そのタグは光の加減で虹色に輝くオリハルコン。超希少（レア）かつ高額で、鉱石の最高峰の硬度を誇り、魔法耐性もかなりある代物だ。

そんなSランクに次ぐAランクの俺だって大したものだと思う。

というわけで、俺はBからSまで受けられるが、Sランクの依頼なんてそうそうないし、それこそ災害級の魔物の討伐が来たら困る。

今回AにもBにも俺がやれそうな依頼はないな、と判断しながら奥のカウンターの受付に向かった。

「いらっしゃいませ、ノアさん。ご用件は何でしょうか？」
「これからしばらく迷宮（ダンジョン）に潜る。その間店を閉めるから、ギルドの在庫で不足しているポーション類があれば納品するよ」
「確認しますので少々お待ちください」
人見知りなので、会話が必要最低限になる。
しかしギルドの職員は気を悪くすることもなく、奥に確認しにいった。それをぼーっと見ていると、別の職員がメモ書きを持ってやってきた。
「ノアさん、ついでいいので、これらの素材を採ってきてもらえますか？」
そう言って俺にメモ書きを差し出す。
「ああ、いいよ。余裕があれば廻り道してもいいし。いつものヤツ？」
さっと目を通すと、職員は戸惑いがちに言う。
「それ以外にも少々……コレなんですが」
メモの一カ所をギルド職員が指差す。
「ああ、コレならボス部屋の階層にあったな。いいよ、久しぶりにボス戦しようと思ってたから」
確かに少々厄介なモノだったが、俺は何度もボスを倒した実績がある。
そもそも、この世界には魔力が存在し、それが一カ所にたくさん溜まり、長い年月をかけて凝り固まることがある。その凝り固まった魔力は、周辺を洞窟や塔など建物の形状の空間に造り変えて、その中に魔物を発生させる。

それを俺達は『迷宮（ダンジョン）』と呼ぶ。冒険者ギルドがその迷宮（ダンジョン）の入り口に門のような魔導具――魔石や魔力で動く道具――を設置し、迷宮（ダンジョン）から魔物が溢れないようにしていた。
凝り固まった魔力は大きな魔力を内包する魔石――迷宮（ダンジョン）・コアの核となり、迷宮（ダンジョン）のどこかに隠されているという。
迷宮（ダンジョン）内に魔力がある限り、中の植物や地形は一定時間で再生し、魔物は復活（リスポーン）するが、核を破壊すると迷宮（ダンジョン）は消えるらしい。今のところ誰もその核を見つけたことがないので嘘か真かは分からないけど。
迷宮（ダンジョン）内のボスは、倒すと何故か宝箱が残り、その中にアイテムが入っている。
他の魔物は、倒すと様々な素材に変化して消える。世間一般的にそれを『ドロップアイテム』と呼び、アイテムの種類や数は魔物ごとに異なり、価値のあるものが手に入るかどうかは運による。
そういうわけで、今回頼まれた素材も中々手に入らずに時間がかかる可能性もあるが、俺が即答すると、職員はあからさまにホッとした。
「助かります。よろしくお願いします」
そんなやり取りをしているうちに、奥に確認しにいっていた受付の職員が戻ってきた。
「お待たせいたしました。現在、初級ポーションと中級ポーション、解毒ポーションが少々心許ないので納品していただけると助かります」
「分かった。じゃあ各五〇ずつでいいか？」
「十分です。ありがとうございます」

俺は異空間収納鞄の中から、各種ポーションを取り出す。
この異空間収納鞄は特殊な魔法陣を組みこんだ魔石を使って作られていて、見た目にそぐわない容量があるのだ。
中々に貴重な物だが、錬金術師の俺になら材料さえあれば割と簡単に錬成できる。錬金術様々だが、売るアテがないので死蔵品になっているけどね。
また内緒だが、俺は、容量無制限、時間停止付き、生き物以外の大抵の物が収納可能な『異空間収納魔法』が使える。何もない空間に出入り口を作り、異空間収納鞄のように出し入れできるのだ。
これを使えるヤツは滅多にいないらしく、ラグ爺さんは人前で絶対に使うな、と口を酸っぱくして言っていた。いわく、国に知られれば生きた輸送車として死ぬまで利用されるだろうと。
それは確かにイヤだ。
だから俺は大事な物は異空間収納魔法、普段使いの物は異空間収納鞄に入れてバレないようにしている。まあ、取り出すときに異空間収納鞄を使うフリをして、異空間収納魔法を使うこともあるが。
「では料金は初級ポーションが一つ一五〇〇G、中級ポーションが二〇〇〇G、解毒ポーションが一〇〇〇Gで合計二二五〇〇〇Gですね」
俺は受付職員の言葉に頷き、金貨二二枚と銀貨五枚を受け取る。
ちなみに銀貨の下の銅貨は一〇〇Gで、鉄貨は一〇G。あと、俺は見たことはないけど、金貨の

上は白貨、その上に黒貨があるそうだ。扱うのは豪商や貴族階級、国家予算くらいだろう。
貨幣は大量にあると重くて持ち歩くのが大変だが、ギルドタグがあれば現金で受け取らず、専用の魔導具にかざして入出、送金手続きができる。
このおかげでお金の盗難や紛失防止になって安心だ。本人の魔力と照合しているので、盗んだり拾ったりした他人のギルドタグでは反応もしない。
「じゃあ、これから迷宮に潜ってくるよ」
「行ってらっしゃい。お気を付けて、ノアさん」
こうして冒険者ギルドをあとにした。
俺は自分の名前の元になったプレートとギルドタグを通したネックレスを服の上から触る。ラグ爺さんが亡くなって六年経つ今も直らない癖。
独りを確かめるためか、独りじゃないことを確かめるためか。
チャリッと鳴った音にホッとして、しかし自分に付けられた二つ名を思い出して内心ムッとする。
そしてそのまま、迷宮に憂さ晴らしをしにいく。
彼がデキ婚したのを知ったのは今から半月ほど前。
知った当初は、ずっと引き篭もってポーションなんかを錬成しまくっていた。作業に没頭している間は、彼のことを考えずにいられたから。
そして錬成しまくった結果、手持ちの素材の在庫が切れた。暇になれば否が応でも彼らの幸せそうな顔がちらついて胸がチクチク痛む。だから、このやるせない気持ちを晴らすために素材収集を

兼ねて魔物を倒しまくるつもりだ。
八つ当たりされる迷宮の魔物には悪いが、俺の気が済むまで倒されてくれ。

さて、アインの街の迷宮の入り口に到着した。冒険者ギルドの職員が常時二人待機し、探索許可の条件を満たす冒険者かどうかの確認をする。
迷宮にも等級があり、この迷宮は上級者向け。
最低でもランクB以上のパーティーから探索許可が下りる。
そもそも『パーティー』は、冒険者ギルドに登録した複数人のグループで、そのランクは個人の平均ランクで決まる。例えば一人がCランクで、残りがAランクならパーティーランクはB。
ギルドタグにパーティーランクが追加で表記されるらしいが、パーティーなんて当然組んだことがないから詳しくは知らない。
本来なら俺みたいにソロで探索するのはあまり褒められたことではないが、Aランクかつ、個人でボスを何度も倒しているから、冒険者ギルドから素材収集を頼まれる。
今回もギルドタグを提示して少し言葉を交わしただけで、何の問題もなく迷宮に潜れた。
「お気を付けて」
「うん、ありがとう」
挨拶を交わして迷宮へ潜ると、最初の部屋の中央に、一メートルほどの長さの六角形の水晶をはめこんだ円柱状の台座が目に入った。

これは破壊・移動不可の転移装置だ。
迷宮の不思議で、一〇階層ごとにある転移魔法陣を使うと、この部屋に移動できる。さらに、ここから一度使った転移魔法陣に直接移動可能なのだ。
この水晶に触れて、行きたい転移魔法陣の階層を念じれば、一瞬で転移できる便利な装置だ。
俺は全部の転移魔法陣を使っているから、途中からでも行ける。ただ今回は素材収集があるから、部屋の奥の扉を潜って一階層から下に向かった。

一日、二日と順調に魔物を倒しながら素材収集をして三日目。
八つ当たり気味に魔物を倒しまくってるせいで、まだ一〇階層。
でも素材収集も兼ねているし、どうせ家に帰っても俺を待っている家族はいないから、気の済むまで迷宮に篭もる。それに、何日篭もっても困らないほどの食材が異空間収納魔法に収納してあるし。
今日は欲しい素材をすでに手に入れたので、早めにこの階層の安全地帯に移動して一泊することにした。
安全地帯とは、魔物の出現も侵入もない、一階層ごとにある一区画の広場のような場所。おかげで冒険者達は安心して休憩や野営ができる。
一〇階層ごとにある転移魔法陣もこの安全地帯にあるので、転移した途端に魔物に襲われた、なんて心配もなく安心だ。まあ、冒険者同士のいざこざはさすがに防げないから、そこは自衛なんだ

けど。
俺は目視と魔物に反応する『探索魔法』で周りに誰もいないことを確認すると、異空間収納魔法から魔導具のテントを出した。
このテントは俺が錬金術で錬成した特別なものだ。認識阻害の魔法と防音魔法、物理攻撃や魔法攻撃無効、さらには空間魔法を付与した魔石を使っている。
見た目は普通の一人用のテントだが、中は平屋の一軒家くらいの広さがあり、台所に寝室、トイレにお風呂、ポーション類の調薬や錬成用の作業部屋がある。魔力登録をした者以外は通れないようになっており、防犯もバッチリだ。
俺は誰もいない広場にテントを設置し、その側に異空間収納魔法から竈を出して地面に置く。魔法で火を熾して、竈に乗せた鉄網の上に小さい鍋を置き、そこに水魔法で水を入れた。
ある程度の料理は異空間収納魔法に収納しているから、今調理するのはスープくらいかな。
俺は異空間収納魔法から出した野菜をナイフでざく切りして鍋に入れ、途中でドロップした猪豚――二足歩行する猪豚――のブロック肉を角切りにして加える。
灰汁を取ってコンソメの素を加え、鍋の蓋を少しずらして乗せて火を弱くしてコトコト煮込む。このコンソメの素は一般的な調味料で、肉や野菜などを煮込んで作ったスープを旅人や冒険者が携帯しやすいように固形に加工したもので重宝している。
「この前冒険者ギルドに納品した分でも錬成するか」
必要な素材を選り分けながら考えるのはポーション類の販売経路のこと。

錬金術でそれなりに性能が高いポーションを作れるが、ラグ爺さんにしっかり教わったからか、薬師ポーションもそこら辺の薬師が調薬したものより性能がいいらしい。
だが、それを販売すると、今まで調薬していた薬師達の仕事がなくなってしまうからと、ラグ爺さんが薬師ギルドと生前契約した通り、販売経路の住み分けで錬金術師ポーションだけを冒険者ギルドに卸している。
もちろん、ウチの店でも販売するのは錬金術師ポーションのみ。
だからといって、調薬は禁止されてないので当然作る。無用な軋轢を生まないために売らないだけだ。おいコラそこ、屁理屈とか言うな。
もっとも街外れの寂れた店に買いに来る客なんて皆無だけどな。いつも開店休業状態。
……別にハブられているわけでは、ない……はず。
違うよな？　え、もしかしてガチでハブられているのか？　いやいや待て待て！　でもそれだと、今まで遠巻きにされたり独りだったりしたのって説明がつきそ……ええ!?
なんてぐるぐると思考が巡り、ポーションを作れないまま、ハッと外の竈のスープの存在を思い出した。慌てて素材を異空間収納魔法に収納し、テントから出たら。
「やあ、こんにちは」
「――へ？」
竈の前に腰を下ろして、和やかにお玉でスープをかき混ぜている、銀髪金瞳で褐色の肌の美丈夫さんがいた。

いや、誰!?「こんにちは」じゃねえよ！　びびってテント内に戻りそうになったのは仕方ないだろう。
ていうか、俺！　いくら考え事していたとはいえ、何で気づかなかった!?　テントに付与した魔法がすごくても、普段の俺なら気配を察知するのに。
この人、何者だ？
そっとテントの中に戻ろうとしたら、美丈夫さんに一瞬で手首を掴まれる。
ひぇ。思わず身体を固くして動きが止まってしまった。
きっと俺がモテないのはこういうところもあるのだろう。
引き篭もりの俺は、初対面の人を前にすると顔が強張って、口数が少ないのを通り越して無口になる。わいわいがやがやと煩いのは頭の中だけ。身体が小さく震えている。
「あー、すまない。安全地帯（セーフティエリア）に来たらいい匂いがしていて、見たら誰もいないのに鍋が火にかかっていて」
美丈夫さんは気まずそうに空いている方の手で頬を掻いた。そして手首を掴んでいる力をやんわりと緩めた。離してはくれないが。
「気配を探ったらテント内にいるのが分かったから、スープの番をしつつ、出てくるのを待っていたんだ」
「……それは、どうも」
スマン、人見知り発動中なので最低限しか話せない。

しかしそんな俺を気にした風もなく、美丈夫さんは続けた。
「あぁすまない。自己紹介が先だったな。俺はアルカンシエルという。長いし、アークとでも呼んでくれ」
名前、長っ。じゃあ、ありがたくアークさんと呼ばせてもらおう。
「ちなみにSランク冒険者だ」
あぁ、Sランク。どうりで察知できなかったわけだ。
たった一つの違いだが、AとSでは実力に大きな壁がある。機嫌を損ねでもしたら国の一つも滅ぼせる力があるという、そのSランク冒険者が目の前にいる不思議。それはともかく。
「……俺はノア、一応Aランクだ」
「ああ、だからこの迷宮（ダンジョン）に一人でも潜れるんだ。俺はこの街に昨日来たばかりでね、ここには今日潜ったので勝手が分からなくて、すまない」
「いや」
そっか、迷宮（ダンジョン）に潜っている間に街に来たなら、俺のことを知らなくて当然だな。それよりも人見知り発動中の俺の方が態度悪いわ。
「こちらこそ、その、悪い。俺、人見知りで」
「いや全然。俺も悪かった。初めてこの迷宮（ダンジョン）内で他の冒険者に会ったから、つい。じゃあ」
そう言ってアークさんは離れようとしたが、俺は何故か咄嗟に袖口を掴んでしまった。
「え？」

「ぁ」
「……」
「……」
お互い戸惑って何とも気まずい空気になった。いやいや頑張れ、俺！
「あの、スープ、食べます？」
「え、いや、だがいいのか？」
「煮込む間に調薬をと思って、鍋のこと忘れてて、助かったので」
「あぁいや、別に。ん？　調薬？」
アークさんが遠慮するから理由を告げると、怪訝な顔をされた。
「あ、俺、薬師で」
「え？　Aランク冒険者なんだよな？」
「あー、本職が薬師で、冒険者（こっち）は薬草とか素材を手に入れるため、やむを得ず？」
「……へえ……」
思えばラグ爺さん、無茶ブリだったよな。いくら登録できるとはいえ、一二歳で冒険者見習いをさせ、やれあの薬草採ってこいだの、やれあの鉱石掘ってこいだの……
おかげで一五歳の本登録の時点でCランクスタートだったし。
ふと物思いに耽ってしまったが、ハッと我に返り、アークさんに声をかける。
「すみません、アークさん。とりあえず食べましょう」

「ああ、それ。さん付けとか敬語はなしでいいぜ」
「え、でも見た感じ俺より年上っぽい顔立ちというか。落ち着いてて貫禄あるし、Sランクだし」
思ったことを言うと、アークさんは苦笑した。
「年上っぽい顔ってどんなだよ。それにランクとかそんなの関係ないだろ。同じ冒険者だしな。そういうノアはいくつなんだ？」
本人がそう言うならまあいいか、と俺は早々に敬語を止めることにする。
「俺は二一歳。アークは？」
「俺は三二歳だ。割と離れてるな」
「もっと若いかと思った」
二〇代後半くらいかと思ってた。
「そうか？　俺はノアが二一歳なのに驚きだ。大人っぽい顔立ちだから、もう少し年上かと思ってたよ」
「あー、見た目老けてるって街の人に言われる。どうせモテないから別にどうでもいいけど」
陰口で散々聞いた言葉だ。これももう慣れた。
「ええ、モテるだろう？　声かけられたり、告白されたりとか」
「ない。一度も付き合ってくれとか、好きだとか言われたことない」
そもそも俺は引き篭もりで、冒険者ギルドに行くか迷宮（ダンジョン）に潜るかくらいしか外出しないし。
勝手にあの人に好意を寄せて、何もできないうちに失恋して、誰にも知られずに迷宮（ダンジョン）に憂さ晴ら

しをしに来て。
「もったいない」
「え？」
アークが何かぼそっと呟き、俺はハッと我に返った。
「いや、何でもない。ところでスープはできたのか？」
「あ、味見して塩コショウするからちょっと待って」
俺は慌てて小皿を出してスープを入れて少し飲む。ちょっと薄いから塩コショウを足して、うん美味い。アークにも味見してもらったらぱあっと笑顔になった。よかった、大丈夫そう。
「じゃあ早く食べようぜ。実は待ちきれなかったんだ！」
アークが子供のようにはしゃぐので、思わず笑ってしまった。ラグ爺さんが死んで独りぼっちになって、失恋して。
どうしようもない寂しさで、笑うことなんてここしばらくなかったのに。
心の隙間がほんの少し埋まった気がした。アークが俺の顔を見て何故か顔を赤らめた。きっと久しぶりだったから変な笑顔になっていたんだろう、恥ずかしい。
場の空気を変えるように、完成したスープを異空間収納鞄（マジックバッグ）から出した深皿によそってアークに渡す。ついでに作り置きのサンドイッチも出してやれば、金の瞳が輝いた。
「いやあ、迷宮（ダンジョン）内でこんなに美味い物食べたの初めてだな」
そう言ってガツガツ食べるアークを見る。

あっという間に食べ終わったのに所作が綺麗だ。貴族や豪商の出なのかも。跡を継がない三男以下や豪商の子供なんかはよく冒険者になるらしいし。
そのままぼーっとアークを眺める。
肩甲骨くらいの長さの美しい銀髪はうなじのあたりで一つにまとめている。そして、筋肉がつきにくい細身の俺とは対照的に、盛り上がった筋肉で、俺の身体の厚みの倍くらいある。
……逞しくて、羨ましい。
ジッと見つめていると、それに気づいたアークが仄かに頬を赤く染めた。ゴメン、気持ち悪かったよね。
「もっと食べる？　肉料理もあるけど」
俺が誤魔化すように言えば、アークはまたぱあっと顔を綻ばせて頷く。アーク可愛い。いやいや、急に何を思ってんだよ。
どうしちゃったんだ、俺。何か今日おかしいぞ。
邪念を振り払って異空間収納鞄（マジックバッグ）から唐揚げを出してやれば、アークは目を輝かせて食べ始めた。いいなあ、こんなにいい食べっぷりの旦那とかいたら料理のしがいがあるよね。こんなに美味しそうに食べる人、今まで見たことないし。
そもそも手料理食べてくれる人って、ラグ爺さん以外にいなかったな。俺って実は寂しいヤツだったんだなぁ。
俺は色々考えてしんみりしてしまう。

「どうした、大丈夫か？」
「いや、手料理食べてくれる人、死んだラグ爺さん以外にいなかったなって思って。アークが初めてだなって」
「ラグ爺さんって、知り合いか？」
「俺の養父。いくつだったのか分からないくらいの爺さんで六年前に老衰でぽっくりと」
「それからはずっと独り？　寂しかっただろう」
「俺、友人もいないし独りぼっちで、何かその、平気だったのに、自覚したら……ゴメン」
不意にぽろっと涙が溢れた。
おかしいな。ラグ爺さんが死んだとき、泣いて泣いて、もう涙は涸れたと思ったのに。
――あ、これはアレだ。成人する少し前から年に一度来るようになった、情緒不安定な日。一週間くらい続く、身体が熱くなって意識がぼんやりする日。
いわゆる発情期と言われるもの。
この世界には竜人族・魔人族・獣人族・人族がいるが、実は俺は自分が何の種族か未だに知らない。
捨て子だった俺はケモ耳のような目立った種族特性もなく、冒険者ギルドで鑑定（アナライズ）した際も「種族不明（アンノウン）」だったんだよな。
だから最初これが発情期って分からなかった。ラグ爺さんは戸惑う俺に気を遣って、はっきり発情期だと言わなかったし。でも、もしかしたら俺の種族について、何か知ってたのかもしれない。

徐々に教えようとしてたんだろうが、その前にぽっくり逝っちゃったんだよな。ラグ爺さんが生きていたら、俺は自分のこともっと何か分かったのかな。すごい人だったし。
それはさておき、俺が最初にこうなったとき、ラグ爺さんは口を酸っぱくして言った。『その期間は変な野郎を近づけるな。襲われたくなけりゃ、家に結界張って引き篭もれ』と。
『襲われる』の意味がよく分からないなりに、毎年その時期になると、ラグ爺さんが死んだあとも、言われた通りに頑丈な結界の魔導具で家ごと覆って引き篭もっていたっけ。
その結界の魔導具も俺が自分で錬成した魔導具だ。魔石の力で、特定の場所をバリアのように囲い、人や魔物が入れないようにする魔法の壁。
そんな発情期が何で今？　まだ当分先のはず。
この世界の一年は十二カ月で、いつも年を越してから三カ月目くらいで来る。前回からまだ七カ月しか経っていないから、次はまだ五カ月も先のはずだ。
とにかくアークに断って片付けてテントに篭もろう。食料なんかは異空間収納魔法（インベントリ）の中にあるし、防犯もバッチリ。中も一軒家と変わらない空間で充実しているし、家に篭もるのとさほど変わらない。
「アーク、悪い。ちょっと訳ありで今から一週間くらいテントに篭もるから、荷物を異空間収納鞄（マジックバッグ）に片付けてしまうよ」
「薫りが（フェロモン）……」
一言断ると、何故かアークは呆然としながら何か小さく呟いた。

その表情の意味が分からずに首を傾げたが、今の俺にはそれに拘っている時間はない。
とりあえず竈の火を落として、皿とカトラリーを浄化魔法で綺麗にして、鍋と竈と併せて異空間収納鞄（マジックバッグ）に片付けるように見せかけて異空間収納魔法（インベントリ）に収納した。
「ノア、一人で篭もるのか？」
「そう。今までも一人だったし――」
「なら俺も一緒に」
「はぁ……!?」
アークは名案とばかりにそう言って、俺の腰を抱くとぐいぐいテントまで押してきた。
しかしこのテントは俺特製の魔導具だから、アークはテントには入れない。
「ちょっと待って、アークは入れないよ。魔導具だから俺の許可がないと出入り不可で――」
「どうやったら入れる？」
俺の言葉に被せるように聞いてきたアークの勢いについ敬語になってしまう。
「あ、はい。鍵になる魔石にアークの魔力登録すれば」
「じゃあすぐやっちゃって」
「はい、この魔石に、魔力流して、コレで……登録完了、デス」
爽やかなのに有無を言わせない笑顔のアークに、思わず片言になる俺。何か押し流されてる気がするんだけど、これってマズくないか？
それにアークが何を考えてるのか分からないのがちょっと怖い。ただ、アークは確実に発情期（コレ）の

ことを知っている。だから俺と一緒に篭もるって言ってるんだ。
理性では「ヤバい、逃げろ」と言ってるのに、本能が「このままヤッちまえ」と訴える。
――何を迷っている？　いつも独りで辛い思いをしていたじゃないか。
ラグ爺さんが亡くなって寒々しくガランとした家は、狭いはずなのに酷く広く感じて、否が応でも俺は独りなんだという現実を突きつけられて。
たった一人で家に結界を張り、誰の気配も感じられない部屋で高まっていく身体の熱を、己の欲を、震えながら自分の手で扱き、吐き出す。
そこに感情はなくて、医療行為のようにただただ欲を出して、熱を一時しのぎで冷ますだけ。出して一瞬冷静になると、虚しさが心に影を落とす。
それもまたすぐに熱を持ち、欲に理性をかき消されて、また出して、虚しくなって。
そんな繰り返しの果てに出るものもなくなり、それでも身体は誰かを求めて疼く。胎の奥が切なくきゅうっとなっても、どうすればいいのか分からないし、相談する相手もいない。
独りで枕やシーツを掴んで抱きこみ、ひたすらこの熱が、衝動が、通りすぎるのを耐える日々。
やっと落ち着いて目が覚めても、よく頑張ったな、なんて微笑んで頭を撫でてくれる人はもういない。
そんなことを六年続けていて、もう慣れたと思っていたけど――
今回はアークがいる。俺のこの状態を分かっていて一緒に過ごすと言っている。
アークとはついさっき会ったばかり。

そりゃあ俺の料理を美味しそうに食べてくれる素敵な人だけど、それとこれとじゃ訳が違うだろう。いくら何でもこんな非モテな俺の相手をしてもらうなんて申し訳なさすぎる。
たとえ俺がイヤじゃなくてもアークの方が幻滅したら？
……あれ、俺、アークと発情期を一緒に過ごすのに嫌悪感とかない。何で？
街の人とか冒険者ギルドの人とかと一緒に過ごすなんて考えたことはないし、考えても嫌悪感で無理。なのにアークには別に何も感じない。むしろ――
「俺、アークに好意を抱いてるのか。ついさっき知り合ったばかりなのに」
戸惑う気持ちは、発情期で熱くなった身体の疼きでどんどん霞がかって消えていく。
気づけば俺はアークとテント内に入り、アークは俺から離れて興味深そうに室内を見渡していた。
「こっちはトイレでここが浴室と。キッチンにリビング、こっちは作業部屋か。奥は寝室だな。すごいな、これ全部ノアがやったのか。まさか錬金術？」
「ん、俺が錬成した」
確認し終えたアークが俺の側に寄ってきた。何だろう、アークからすごくいい匂いがする。さっき初めて会って手首を掴まれたときも微かに薫っていた。香水？
今はもっと強く薫ってくる爽やかで甘い匂い。俺はすーっと深く、その初めての薫り（フェロモン）を吸いこんだ。すると頭がクラッとして何故か胎の奥が切なくなった。いつもは徐々に疼くのに、今日は最初から激しい気がする。
「ね、もうベッド行きたい」

荒い息になっているのが自分でも分かる。腰が砕けそうで立っているのも辛くて、アークに寄りかかった。
そんな俺をアークはひょいと横抱きにして、さっき確認した寝室に向かう。
あぁ、本当にいい匂い。こんなこと初めてだ。人見知りな俺が、今日知り合ったばかりのアークと発情期を過ごすなんて。
寝室に入るとベッドにそっと横たえられ、覆い被さるようにアークが顔を寄せてきた。俺は戸惑ってどうすればいいのか分からず、アークをジッと見つめる。
アークはクスッと笑いながら言った。
「こういうときは目を閉じて、静かに受け入れて」
「ん」
俺は言われるがまま、目を閉じてそのまま身じろぎせずに待つ。
俺、初めての口付けをアークとするのか。
頭の中で一人騒いでいると、唇に柔らかい温もりが触れた。それは俺の唇を食んだり吸ったり角度を変えてしばらく続く。
こういうときってどうすればいいんだ？
息を吸うタイミングが分からずに苦しくなって、思わずぷはっと口を開いた。そこにぬるりと温かくて湿ったものが入りこんできて、つい目を開く。
「ん、ぅ!?」

至近距離にアークの顔がぼやけて見えて、それからまた口付けをされていることに気づき。そこで、今口の中に入ってきたのがアークの舌だと認識したときには、もう口腔内を好き勝手に嬲られていた。
「あ、ううんっ」
歯列をなぞられ、上顎を擽られる。
口の中ってこんなに気持ちいいんだ。初めて知った。
俺はアークにされるがまま、うっとりと身を任せる。
「ふ、よさそうだな」
「ぅあ、ん」
いつの間にか口付けが止まっていて、俺の上半身は裸になっていた。ネックレスのギルドタグとノアズアークのプレートが擦れてチャリッと鳴り、その音にハッと意識が戻る。
アークの手が俺の腰骨の辺りをさわさわと羽毛のような手つきで触れてきて、自分の口から出たとは思えないような甘い声に驚き、咄嗟に手の甲で口を塞ぐ。
「どこもかしこも感じるようだな。いつも一人で過ごしてたって言ってたが、誰かに触れられるのは本当に初めて？」
「ぁ、初めて。触れるのも、こんなことしてるのもアークだけ、なのに、何で？」
アークに触れられているって思うだけで反応している。発情期は初めてじゃないのに、どうしてこんなに感じるの？

「――から、かな？」
「？　な、に？」
アークの呟きを聞き取れずに聞き返す。
「いや、嬉しいよ。俺でこんなに感じてくれて。嬉しすぎて抱き潰してしまいそうだ」
「っだ、抱きっ!?」
さっきまで感じていた戸惑いが吹っ飛んで、今度は不安が襲ってきた。
「おれ、俺は初心者なの。この身体は真っ新で何も知らないの。お願いだから優しくしてよぉ」
俺は目に涙を溜めて、下からアークにお願いした。すると、アークは目を瞠ってから自身の目元を大きな手で覆って天を仰いだ。どうしたんだ、アーク？
「いや何この可愛い生き物。俺の理性が保たねえわ。全部俺が初めてって、え？　もうコレ色々俺が仕込んじゃっていいってことかな!?」
すっごい早口で小さく呟いているから何を言ってるのか分からない。アークを不安な気持ちで見つめたままでいたら、アークは顔を覆っていた手を離した。
「なるべく、優しく……善処する。が、暴走したらすまない。先に謝っておく」
アークはやや苦しげな表情で言うと同時、俺にのしかかってきて再び口付けをする。
え？　え？　ソレってたぶん『気持ちは優しくするつもりだけど、無理だからごめんね？』って意訳では？
しかし、アークに口腔内を嬲られて再び思考は蕩けていく。あまりの気持ちよさに俺は思わず

アークにお強請りをしていた。
「気持ちいい、アーク、もっとぉ」
「あぁ、ノアの気の済むまでしてあげるよ。それ以上のこともね」
微笑んで返されたその言葉に、俺は嬉しくなってアークに顔を寄せた。
いつの間にか全ての衣服は脱ぎ払われて、俺の白くて細い脚も露わになっていた。その中心をアークが優しく握ってくる。
「コレに触れたヤツはいるの？」
ええ？　さっき初めてって言ったじゃん。誰もいないって。なのにまた聞くって、アークって疑り深いのか、それとも意地悪なの？
「やあん、いない、誰も。アークだけ」
「そう。よかった。これからも俺だけだよ」
「ぁ、うん。アークだけぇ。あ、んんっ」
アークは嬉しそうに言うと、俺の首筋にねっとりと舌を這わせながら握っていたソレを軽く扱き始める。先走りで濡れていたソレは彼の手であっという間に高められ、呆気なく精を吐き出した。
俺、感じすぎでは？　いやでもずっと独りでこんな経験ないし、溜まってたんだきっと。
アークが口付け以上のこともあるって言ってたけど、コレで終わりじゃないの。俺、壊れない？
ぼーっとしたままそんなことを思っていると、アークが再び俺の陰茎を刺激してきた。発情期中は一度吐精したくらいじゃ熱は冷めないから、あっという間に勃起してまた思考が蕩ける。

「気持ちいいね、ノア」
「ん、きもちい、もっと」
「いいよ、こっちも触ってあげるね」
俺は荒い息で、舌っ足らずになりながら、まだまだ収まらない熱にもっととせがむ。アークはゴクッと喉を鳴らして俺の後孔へ指を伸ばした。
途端、すーっとする感じがした。どうやら浄化魔法で胎内を綺麗にしたようだ。
ぼーっとしながらアークを見ると、自分の異空間収納鞄（マジックバッグ）から潤滑油を取り出す。それを指に纏わせて、人差し指をゆっくり俺の後孔に押しこんでくる。
発情期で緩んでぬかるんでいたとはいえ、初めて挿入される異物感に思わず身体を固くした。
「ぅあん、やあぁ、何？　アーク、こわいぃ」
「大丈夫だよ、そう、力を抜いて。この奥、疼くんだろう？　俺が鎮めてあげるよ」
「……ほんと？」
「ああ、大丈夫。心配しなくても中には気持ちよくなるところがあるから」
そう言ってアークが俺の胎を解していく。いつの間にか、俺の後孔はアークの指を三本飲みこんでいた。
「ぁあっ、そこ、いやぁ、きもちい」
「中で上手にイケるまでもう少し頑張ろうか。ほら、ここがいいんだろう？」
アークは弄られてぷっくりした俺の胎のシコリを容赦なく指で押したり引っ掻いたりして、俺の

反応を窺っている。
快感が強すぎて俺は涙を溢しながら頭をいやいやと振るが、アークは止まってくれない。意地悪だ。
「――っ！　あっ、ぁ、やあ、何か、あぁ……あっあっんん――!!」
俺は身体をガクガクと震えさせてイッた。初めて後孔を弄られてイッた。
見ると、俺の陰茎は射精していなかった。そして酷く長い余韻が残る。
「お利口だよ、ノア。上手にイケたね。じゃあ、ご褒美をあげよう」
イッたばかりで息の整わない俺の両脚をぐいっと開くと、丸見えになった後孔がヒクヒクとしているのが自分でも分かった。アークはそんな後孔と俺の顔を見て言った。
「本当は後ろから挿入した方がノアの負担が少ないんだけど、初めては俺の顔を見ながらシような」
どういうことかよく分からないけど、俺もアークの顔を見ながらの方が安心できる。
アークの熱い剛直が後孔をぐちゅっと擦った。
俺の喉がゴクッと鳴る。これから俺よりも大きくて太いアークのアレを受け入れるの？
「ふっ。ノアが誰に初めてを捧げたか、誰と性交（セックス）してるのか、その瞳でよく見てその身体に刻みこんで？」
「アーク？　っ――!!」
そう言って獰猛に笑った彼に怯えて一瞬頭が冷えたけど、直後に襲った圧迫感とすさまじい快感

に頭が沸騰して、俺は何も考えられなくなった。
――ナニコレ、キモチイイ。
アークが挿入した瞬間に再びイッた。今度は中と外、同時だった。中はアークの剛直をぎゅうぎゅう締め付け、俺の陰茎は射精後もタラタラと白濁を溢す。
「っ予想以上だな、ノア。気持ちいいなんてモンじゃない。はぁ、止まらなくなりそうだ。ノア？大丈夫か？」
ぺちぺちと頬を軽く叩かれて意識が戻る。俺、一瞬意識がトんでたらしい。そんな蕩けた頭で、俺は普段なら絶対に言わないようなことを口にしていた。
「アーク、へへ、もっとぉ」
「あー堪らねえ。可愛すぎだろ。こんな発情期のときに煽るなよ、マジで抱き潰すぞ！」
「？　いっぱいシて？　おく、きもちぃ。もっとぉ、おねがい」
今まで俺に触れる人は誰もいなかった。
ちょっと意地悪だけど丁寧に優しく触れてくれたアークのことを、俺はもう好きになっている。
美味しそうにご飯を食べて、できるだけ優しく触れてくれる。心地のいい声も、子供みたいな笑顔も、色っぽい表情も、うっとりするような甘い薫り（フェロモン）も。
初めて知った、誰かの手で高められる快感。
これで惹かれない方がおかしいだろう？
たとえこの場限りだとしても、今はアークだけ見ていたい。感じていたい。

未だに吐精せずに存在する、俺の胎の中の硬い剛直を感じながら。
「アークの色に、染まりたい」
「……っ、ノア」
呻るようなアークの声を合図に、俺の発情期は本格的に始まった。
俺は何度もイッているのに、アークはまだ一度も達してないようで、体位を変えながら何度も中を抉ってくる。
「う……ぁん、やぁ」
俺はイキすぎて、アークに何か言われてもまともに返事ができない。気づいたらいつの間にか後背位になっていて、後孔に硬い剛直を挿入したままのアークが俺の背中にのしかかり、耳元で囁いた。
「今度は一緒にイッて、俺にノアのうなじを咬ませてくれ。いいよな？　ノア、俺の番い。好一対」
「うん？　咬む？　……番い？　こう――何？」
快感が過ぎて、俺はぼんやりした頭でアークの言葉をオウム返しのように呟いた。
うなじを咬むって、何で？
番いって何だっけ。好一対の意味は、えーと……
「好一対な。要は俺と一生一緒に過ごすってことだ。番いは唯一の伴侶のことだ。結婚。な、いいだろ？」
唯一の伴侶、結婚。

え、じゃあ、この場限りじゃないってことで、番ったらこれからも一緒に過ごせるの。そうなったら俺はもう独りじゃない？
アークが俺の手料理を食べて、一緒に笑って、寝るときも目が覚めたときも側にいてくれる。
もう、独り寂しさに震えなくていい。
そんなの、どうするかなんて考えるまでもない。
俺はアークが好きなんだから。
蕩けて曖昧な思考が俺の本音を引き出した。
「ずっといっしょ、うれしぃ、咬んでぇ」
「っありがとう、大切にする。愛してる、ノア」
俺に優しく愛の言葉を囁いてくれたアーク。これは夢かもと心の隅で思うも、それでもいいかと今は幸せな気持ちに浸る。
しかしアークが高みに向けて激しく動き出したせいで、ほわほわした気持ちは快感に上書きされてあっという間に限界を迎えた。
「は、はっ、アーク……アーク」
「ん、どうした、ほら気持ちいいんだろう？」
「いい、いいよぉ、イッちゃう」
「は、イッていいんだぜ、ノア」
そう言ってアークがトドメとばかりに剛直の楔を最奥に打ちこんで、俺はその衝撃で達してしま

い、中をぎゅうっと締め付けた。
「あっぁあああぁ――！」
「クッ！」
その瞬間、俺のうなじをぬるっとしたものが這って、直後、痛みが襲った。液体がつうっと首筋を伝う感覚と鉄の匂い。
ああ、咬むってこう、マジで咬みつくんだ。
呑気に思ったそのとき、胎の中が熱いモノで満たされ、それと同時に俺はまたイッて身体が勝手に跳ねた。
それをアークが押さえつけるように抱きしめ、首筋をペロリと舐める。ちょっとズキズキして痛い。痛いってことは、これは現実ってことで。
――俺、本当にアークの伴侶になったってことだよな？
咬み痕の血は止まったようだが、それよりも俺は息を整えるのに必死だった。だって抜いてない俺の中のアークの剛直が再び硬くなったのを感じ取っていたから。
俺がぎこちない動きで後ろを振り向くと、アークはニヤリと笑っていた。
「抜かずの二回戦な」
それを聞いた俺はどんな顔をしていたのか。たぶん慄きながらも、期待と興奮で蕩けた顔をしていただろう。
だってこんなに俺のこと好きって、愛してるって全身で語ってくれるんだぞ。そんな人がもう俺

の旦那様なんだ。
アークに抱かれると気持ちよくて、よすぎて抵抗できなくて。
これが惚れた弱みってヤツなのかなあ。チョロくてもいいんだ。これから先、ずっと俺だけの旦那様なんだから。
「アーク、好きだ」
「俺も、愛してるよ。ノア」
ほんの少し前までは失恋の痛みを感じていたのに、こんなに満たされるなんて。大切な人が側にいる、独りじゃない幸せ。
ラグ爺さん、俺も幸せになれそうだよ。
そんなことを考えているうちに二回戦に突入した。そうしてアークがやっと達した頃、俺は体力の限界で意識を失った。

どのくらい気を失っていたか分からないが、意識が戻ると、いつもの自分の家にいるような感覚で、無意識のうちに食べ物や飲み物をテーブルに並べていた。――異空間収納魔法から。
「アーク、ご飯……」
初めての性交で疲れ果てていたうえに寝ぼけていた俺は、アークのギョッとした様子に理解が及ばず、首を傾げただけだった。
「異空間収納魔法――それも使えるのか。錬金術といい希少すぎだろう。不安要素が多いが、やっ

と見つけた唯一の番いだ」
アークが俺の頭の上で何やら呟いていたのは分かったが、眠くて耳を素通りしてしまう。
「お前が何者でも、たとえ死に神だったとしても構わない。俺はノアに一生を捧げるつもりで番ったんだから」
ぎゅっと背中から抱きしめるアークの言葉に応えられないまま、俺は背中に感じる温もりに安心して、再び睡魔に身を委ねたのだった。

◆◆◆

俺――アルカンシエルがノアと出会う前日のこと。

ここアインの街の迷宮（ダンジョン）に来たのは本当に偶然だった。
俺はSランクの冒険者で自由気ままに世界中を周っている。いろんなクエストを受けていろんなヤツと後腐れのない一夜の関係も持った。中には執着してくるヤツもいたが、俺が少しお話しすれば皆、退いてくれた。お話？　そりゃあ肉体言語だろう？
面倒なら止めればいいって思うだろうが、長い人生、いや竜人生をともにする唯一の番いを探す旅だから、見つけるまでは続ける。何となくコイツかもって思うヤツと身体を合わせてみたが、いつも本能が違うと言うんだ。

実は俺は竜王国という竜人の国の大公家の三男。祖父が現竜王の弟だ。
竜人は普段は人型をとっているが、体長は数メートルに変化し、背中に蝙蝠のような翼膜を持つ完全な『竜体』にもなれる。まあ滅多なことじゃ竜体にはならないけどな。
他の種族と比べてずば抜けた戦闘力と身体能力を持ち、寿命は圧倒的に長い。
さらに、竜人の特徴として唯一無二の番いを欲し、番いが望めば国を滅ぼすくらい盲目的に溺愛する。
過去に実際、『傾国の番い』っていうヤツがいたらしい。それを教訓に今は本人達も気を付けるし、周りのヤツらがやんわりと暴走を止めるようだが。
とは言え、番いに巡り会える竜人は少ないから、恋愛結婚や政略結婚も普通にある。ただ俺の祖父母や両親は番い同士で仲睦まじく、それを幼少から見ていたから、俺は冒険者としてあちこち旅をしながら自分の番いを探し歩いているわけだ。
そんな感じでのんびりやってきたこの街の冒険者ギルドに顔を出すと、誰も彼もが俺を見てぽーっと顔を赤らめた。
またか、と思う。自惚れじゃないが俺の銀髪金瞳、褐色の肌は目立つ。顔もそれなりに整っているからな。
どこでも最初はこんなモンだと諦めつつ、受付でポーションの確認をする。魔法はもちろん使えるが、万が一にも準備不足でやられたなんて初級クラスの冒険者じゃあるまいし、笑いのネタにもなりゃしねえ。

ポーションの質は薬草にもよるが、ほとんどは薬師の腕によって左右される。粗悪なモンを掴まされては命取りになるからな。

『ポーション類を見せてもらえるか？』

いつものようにSランクの冒険者ギルドタグを見せてから聞く。最初にこれを見せれば、ギルドの方もボッタクリ紛いのことはさすがにしてこない。まあ、たまに馬鹿もいるが。

『はい。ただいまお持ちいたしますね』

ギルドの職員はそう言って忙しなく奥へ入っていき、間もなくポーション類を一つずつ持ってきた。

『お待たせいたしました。こちらです』

カウンターに並んだポーション類を手に取り、俺は鑑定（アナライズ）の魔法を使う。

この魔法には下級・中級・上級のレベルがあり、級が上がるほど名前、品質、効果、製作者、所有者などの詳細な情報を読み取れる。上級者は希少（レア）で、ギルドや商人で高給で雇われるほど重宝される。ちなみに俺は上級だ。

【錬金術師ポーション（初級）

品質：S

効果：飲んでも塗っても効果は同じ。浅い傷を瞬時に治し、軽い病にも効く。通常の錬金術師ポーション（中級）と同等かそれ以上の効果あり。

製作者：ノア】

薬師ポーションではなく、錬金術師ポーションと出て驚いた。他のポーション類も鑑定（アナライズ）していくと、そのどれもが錬金術師ポーションで規格外の性能だった。

『いい腕だな。どれも最高品質だ。他所でも買えるのか？』

『あ、いえ、ここと製作者である薬師のノアさんのお店のみです。他はその、地元の薬師の方々の販売経路でして、薬師ギルドにも置いてません』

『――ふうん？』

歯切れの悪い職員の言葉に、俺はピンと来た。

おそらくこのノアはよそから来た人で、腕がいいせいで、薬師ギルドに妬まれて嫌がらせを受けているのだろう。地元の薬師ギルドは販売ルートを制限して、この薬師を仲間外れにしているようだ。

『このノアってどんなヤツなんだ？』

興味を惹かれて受付の職員に聞いてみた。

『ノアさんは人見知りで無愛想でぱっと見はとっつきにくいですが、意外とお人好しで気のいい方ですよ』

『長い黒髪に金のメッシュが入っていて瞳は銀色。背は高い方ですがひょろっと痩せてます』

『彼は元々この街の生まれじゃないんですよ。他所から来た薬師だったお爺さんとここに住んでいるんです。そのお爺さんは六年前に亡くなりましたが』

俺達の会話を聞いていた別の職員達が付け足すように横から言葉を挟んだ。

『なるほど。ではそのノアの店を教えてくれるか？　そちらへ行ってみよう』
そう言うと、職員が焦ったように教えてくれる。
『先日、彼はしばらく迷宮（ダンジョン）に潜ると言ってましたので、お店の方にはいないかと』
『迷宮（ダンジョン）に？　まあいいや、とりあえず各ポーション一つずつと店の場所を教えてくれ』
職員にそう返してポーション類を購入する。
『畏まりました。ではこれで。お支払いはどういたしますか？』
『ギルドタグから引いてくれ』
そう言って魔導具にギルドタグをかざす。ピッと音が鳴って支払い完了だ。
『はい、ちょうど頂きました。それと、こちらがノアさんのお店までの地図です』
『ありがとう。じゃあな』
俺は腰に付けたポーチ型の異空間収納鞄（マジックバッグ）にポーション類を収納して、冒険者ギルドを出る。
そしてその手書きの地図通りに進むと、街外れに件の薬師の店があった。店舗兼住居のようだが、かなりボロい。
それに長閑といえば聞こえはいいが、周りは林ばかりで『ご近所さん？　何それ美味しいの？』って感じだ。人も魔物の気配もない。ここまで何もないと、かえって気味が悪い。
ギルドの職員が言った通り店は閉まっていて、ご丁寧にえげつない結界魔法がかけられていた。
裏手も見たが、薬草畑と思われる場所にまで。
素人目にはただの結界魔法に見えるが、人と魔物避けが組みこまれている。どうりで何の気配も

ないわけだ。
『コレはまた。面白い』
俺はほくそ笑んで、異空間収納鞄（マジックバッグ）から先ほどのポーションを一つ取り出して眺めた。
『錬金術師ポーション。初めて見たぜ。どんな錬成をしたらこんなのが作れるんだ？　病に効くって聞いたことないぞ。ノアは薬師だって言ってたよな？』
こんなのを余所者が作って売ったら、そりゃあこの街の薬師は廃業だろうな。だからどう見ても商売にならなそうなこんな街外れに店があるんだろう。ハブられ確定だな。
先ほどのギルドの職員の迷宮に潜るという発言がやや引っかかるが。
『すご腕薬師のノアに俄然興味が湧いた。明日、早速迷宮（ダンジョン）入りしよう』
そうと決まれば必要な物の買い出しだ。
久しぶりにワクワクしている。
――そうして、俺はノアに出会えたんだ。

第二章　迷宮攻略と旅立ち

唐突に意識がハッキリした。目が覚めると同時、俺は記憶を巡らす。
俺、何してたっけ？　ここはとても見覚えがある。テント内のベッドだ。
でも何で寝てるんだろう……裸で。
――は　だ　か？
「裸ー!?」
ガバッと起きようとして失敗した。俺のお腹に何かが巻き付いてて引っかかったから。
んん？　何、なに、ナニー!?
「ぉぉおおお、えええっ？　はあぁ？」
巻き付いてたのはアークの腕。
何でアークと寝てるの!?　何してた俺、思い出せ。思いだ、し……ぅあっ、あああ、ナニしてました!!
「っぷっくくっ、ははっ！」
「あっ、なっ何、アーク起きてっ!?　っあぅ、あああっ！」
覚えてる、ぼんやりだけど記憶があるぅ。テントにはアークが強引に入ったようなものだけど、

そのあとは発情期で蕩けた俺に引きずられるようにせっ、せっ、性交しまくってたような。
ダメじゃん俺、迷惑かけっぱなし。
「あっあの、ごめっごめんなさ――」
「謝らなくていいよ。たぶんだけど、俺の薫りにあてられたんだと思う」
「え？」
俺が焦っているうちに笑いを収めたアークは、俺の言葉を遮るように言った。
「まだ発情期じゃなかったんだろ。実は俺達、好一対の番いだったんだよ」
「好一対、番い」
発情期中に夢現で聞いた気がする。
何だっけ、伴侶とか結婚とか、ずっと一緒とか。
それを思い出してハッとした。
思わずガバッと自分の首の後ろに手をやる。そろっと触った肌には咬まれた歯形痕がかさぶたになっていた。
「ああ、強く咬みすぎた、ごめん。でも咬んだことは謝らないよ。ちゃんとノアに確認を取ってから咬んだし、合意だからな。何なら証拠もあるけど、見る？」
そう言ってニヤリと笑うアークが触れた耳のピアス。
それには見覚えがあった。記録媒体の魔導具だ。
これは魔石に映像や音声を記録できるもので、ピアスや腕輪など、アクセサリーの形をしている

ものが多く、記録のタイミングは自分で決められる。記録した魔石は使い捨てで改ざんできず、犯罪の証拠品になるために商人や貴族に人気があった。

それに記録してあるなら間違いなくそうなんだろう。確かに自分も咬んでくれと言った記憶がある。あるが！　それって情事中の出来事だよね。ちょっと待って、ずっと録ってたのー!?

思い至った事実にアークを見ると、否とも是とも言わずににっこり笑うだけ。

たぶん俺の顔は真っ赤になってると思う。いや真っ青かも。ぅわあー！　怖い、怖いよぉー！

ガクブルして首を横に振っていると、アークがとりあえず身支度を整えようと提案してきた。

……確かに、着替えよう。

「着替え終わった。えと、お腹空いてない？　俺はお腹空いてて。話は食べながらでもいい？」

「ああ、俺も食べるよ。リビングに行こう」

「何か、アークの方が家主みたい」

「この三日間、ノアのお世話をずっとしてたからな。ははは」

「はぁ。ん、三日間？　一週間じゃなく？」

俺、いつも一週間くらい続くんだけど。聞き間違い？

「ああ、俺と番ったからな。番いがいる場合は番いの体液、まあ精液だな、それを注ぐと満足するらしくて三日から五日くらいで終わるんだって」

そうなんだ。それは知らなかった。

「その代わり、番うと一年に一度の発情期が何度か来るようになる。発情期が一番子を孕みやすいから、番うと頻繁に来るようになるらしい」

「え、マジ？」

「マジ。そして番いの俺にしか発情しなくなる。そうしたらすぐ抱いてやるし、発情期でなくても抱くから心配すんな。戦闘後とかも昂るから抱きたくなるし」

そう言って笑うアークに溜め息をつきつつ、リビングへ移動した。そして、テーブルにご飯を出そうとして固まった。あれ、俺、発情期中に異空間収納魔法から出してなかった？

「あの、アーク、俺、その」

内心冷や汗だらだらで声をかけると、アークは笑ってなんてことないように言ってきた。

「異空間収納魔法のことなら、ノアがテント内で普通に使ってたから気にしてないよ。最初は驚いたがな。いつもは人前では使ってないんだろう？　発情期でぼんやりしていたし」

ああ、やっぱりやらかしてた。

「うん、ごめん、変なことに巻きこんじゃって。秘密なんだ」

見られたのがアークだけでよかった。ホッとした俺は、異空間収納魔法から料理を出した。

発情期中は元々食べる余裕があまりないから、いつも終わったあとは腹ぺこだ。『空腹だとろくなことを考えないからひとまず腹ごしらえだ』とラグ爺さんはよく言ってたなあ。うん、よく分かった。

「どうぞ、召し上がれ」

「じゃあ遠慮なく」

立ち読みサンプル
はここまで